

共同研究 ● プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性 (2009-2012)



焼畑耕作によって、焼畑休閑林という新たな「林」が出現した(2006年、ラオス、ウドムサイ県)。

共同研究「プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性」では、植物に由来する種々のモノ [=プラント・マテリアル] をとりあげ、東南アジア大陸部山地でフィールドワークを展開してきた共同研究員が、その外見的变化と意味の変容について検討している。2009年度の開始から2011年5月までに、すでに5回の研究会を開催してきた。本稿ではそのうちの第4回、第5回研究会についておもに紹介し、本研究の中間報告としたい。なお、本研究の目的や設定については、『民博通信』131号(p. 26-27)の関連記事を参照されたい。

研究会での活動

第4回研究会(2010年12月18、19日)では、高井康弘(大谷大学)が「水牛飼養に関わる植物—ラオス北部の事例から」、田中伸幸(高知県立牧野植物園)が「東南アジア大陸部の植物多様性」、神崎護(京都大学)が「森を拓いて林をつくる—森林利用の諸パターン」と題した発表をそれぞれおこなった。さらに、第3回研究会での落合雪野(鹿児島大学)の発表に関連して、実物資料を観察した。

高井は、ラオス北部のタイ系諸民族によるスイギュウ飼養に着目した。スイギュウを飼うということは、自然環境のなかから飼料として利用できる植物を選び出し、家畜を通じて間接的に利用することである。発表では、市場経済が発展し、土地森林分配制度が浸透するなかで、放牧適地が減少したり、それま



ラオス北部におけるバラゴムノキ植林地の拡大は、スイギュウの放牧方法に影響をあたえた(2009年、ラオス、ルアンナムター県)。

で飼料として利用されてきたイネ科植物が工芸素材として市場に出荷されたりするなど、人と家畜と植物の三者関係が変わりつつある実態が紹介された。

田中は、東南アジア大陸部の自然環境と植物相(フロラ)について、植物分類学の研究成果を例にひきつつ解説した。その結果、東南アジア大陸部が地球上の生物多様性ホットスポットのひとつとして位置づけられており、人びとの利用の対象となりうる植物が多種多様に存在する地域であることが確認できた。また、ミャンマーのラン科植物について、これまでは観賞用植物や髪飾りとして利用される事例が知られてきたが、最近では、薬品原料として売買の対象になったり、健康食品が開発されたりする種が新たに認められるなど、

その経済的価値が強調されつつある状況があきらかになった。

神崎は、森林生態学者の立場から、東南アジア大陸部と島嶼部の6か所の森林の特徴を詳細に示したうえで、複数の植物の総体である「林」をプラント・マテリアルとしてとらえる新たな視座を提示した。神崎によれば、原生林である「森」にたいして、人が樹木の伐採、動植物の狩猟や採集、焼畑耕作などのさまざまな関与をおこない、その環境を改変した結果、東南アジア各地に異なる性質をもった林が成立したという。この発表に対して、自然環境や関与のあり方がそれぞれに異なる森林をどのように相互比較すべきかについて、議論が続いた。

落合の発表に関連した実物資料の観察は、鹿児島大学総合研究博物館第10回特別展「植物のビーズ『ジュズダマ』と暮らす」の会場でおこなった。ここでは共同研究員が、ジュズダマ属植物の形態的特徴や生育地の状況を紹介した資料、ジュズダマ属植物の種子を用いてつくったモノを手がかりに、「生態系のなかから特定の植物を選び出す→ある部位に注目する→その部位を素材にモノをつくる」という一連のプロセスを追体験し、植物からモノにいたるすべての場面を検討の対象にしていくことを確認した。

第5回研究会(2011年2月19日)では、生態学者の加藤真(京都大学)が「動物にとってのプラント・マテリアル」と題して発表した。加藤はまず、進化の過程で動物と植物が共生

的相互関係を発達させてきたことを紹介したのち、動物が植物を素材として利用する事例を精査した結果、まとう、住む、道具をつくるなどの用途を植物に見出す動物が存在していることを指摘した。このような動物の生活圏は、陸域のみならず、河川や海などの水域にも広がっているという。

さらに、参加者全員で過去5回にわたる研究会での発表と討論を俯瞰して成果を確認したうえで、今後追及すべき点を抽出した。

2010年度までの小括

これまでに、共同研究員8名と特別講師1名が9題の発表をおこなってきた。その内容は、おおまかに次の3群に分けられる。

第1の群は、総論として、プラント・マテリアルの母体となる東南アジア大陸部の植物相(第4回 田中伸幸)、および植物をモノ化していく主体となる民族集団(第3回 加藤高志 名古屋大学 特別講師)について、基礎的な情報を提供する発表である。これは、専門分野を異にする共同研究員が議論の土台を築くために必要な作業であった。また、動物の植物利用に関する加藤真の発表(第5回)は、行為の主体を人以外の動物にまで広げ、プラント・マテリアルの意味そのものを問い直す機会となった。

第2の群は、各論として、ある特定の植物に着目し、これを原料や素材につくられるプラント・マテリアルのあり方を論じる発表である。栽培植物であるダイズ(第2回 横山智 名古屋大学)やチャ(第2回 佐々木綾子 京都大学)、人里植物であるジュズダマ属植物(第3回 落合雪野)やイネ科の飼料植物(第4回 高井康弘)、野生植物であるラン科植物(第4回 田中伸幸)について、食べる、飲む、保存する、癒す、嗜む、供える、つくるなどの事象がとりあげられた。そして、1)特定の域内で利用されていたモノが商品化され、より広域的な市場で取引されるようになる過程とその要因、2)加工技術の変化と地域的な拡散、その結果生じるモノの特徴の差異、3)モノに対する文化資源としての認識とそれにとまなう経済価値の拡大、などの点が検討された。

第3の群は、複数の植物をとりあげ、総体あるいは集合体としてのプラント・マテリアルのあり方を論じる発表である。これは、本研究を始める前には想定していなかったアプローチであった。

榎永真佐夫(第3回 国立民族学博物館)は、黒タイの年代記に文字情報として記録されたプラント・マテリアルを、現在のベトナム北部の黒タイの生活や生業から実体化することをこころみた。ここでは、象徴的な意味や実用的な用途をもつ多くの植物がとりあげられたが、歴史研究の特徴を活かしつ



ラン科植物デンドロビウム・モスカートゥム *Dendrobium moschatum*は、カチン系民族集団のひとつであるロンウォーによって、衣服の装飾素材として用いられている(2005年、ミャンマー、カチン州)。

つ、モノの変化に関する視点をどこにおくかが課題となるだろう。

神崎護(第4回)は、時間的な経過にともなって、人びとの価値づけのあり方が反映して性質づけられたモノとして林をとらえた。本研究では、モノをめぐる加工や交換のなかで、モノが空間的に移動しながら、さまざまな主体の間を渡り歩く状況を対象として想定してきた。だが、林というモノについては、その場から動くことはなく、また、当地に居住する主体が長期間にわたって継続的に、さまざまな主体が当地を訪れて短期的に、といったように主体側の関与の状況も異なっている。林の変化にかかわる要因をどのように整理し、記述していくかについては、今後追加して発表される予定である。

今後の展開をめぐる

本研究の中間的な成果として、モノを手がかりに東南アジア大陸部の生活世界を実証的に記述するための骨組みができあがりつつある。だがこれまでのところ、発表のなかで、植物の生き物としての性質に焦点が偏ったり、モノのやりとりのプロセスや、それに関与する主体間の関

係に目がとどきにくかったりといった状況があったことは否めない。また、植物のカテゴリーに関しては、対象地域の野生植物や栽培植物が議論の中心にあるのは当然のことであるが、移入種や導入種については検討が保留されている。また、モノのカテゴリーに関しては、食べ物や飲み物、薬のような「消えモノ」がとりあげられることが多く、物質文化の他のモノについては、十分な検討ができていない。

このような点を踏まえつつ、今後は、植物を起点にしつつも、加工後のモノのあり方、あるいは、モノをめぐるやりとりやその担い手の変化に視点を置き、その過程で現れる価値づけの変容についてくわしく追及していきたいと考えている。そのために、1)そのモノがゆえに語りうる世界、2)モノのもつ物質性のレベルと意味のレベル、3)考え方の軸としての変化の諸相、あるいは民族間関係、民族内関係の3つのポイントに留意しながら、さらに発表と議論を重ねていく予定である。

おちあい ゆきの

鹿児島大学総合研究博物館准教授。専門分野は民族植物学、東南アジア地域研究。著書に『アオバナと青花紙：近江特産の植物をめぐる』(阪本肇男と共著 サンライズ出版 1998年)や『ラオス農山村地域研究』(横山智と共編著 めこん 2008年)など。